

養護学校生中等部・高等部による立位姿勢の安定性について ～中等部・高等部を比較して～

藤井 研次 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)
指導教員 新宅 幸憲/河西 正博

キーワード：障がい者, 運動能力, 重心動揺

1. 緒言

近年, 我が国の障がい者の多くは余暇があれば, 家でテレビ観賞や音楽鑑賞をして過ごしていることが報告されている. そうした中で, 知的障がい者はこだわりが強く, 食べ物・食することへのこだわりがあり, 健康管理の意識づけが非常に困難性があることから肥満傾向になる. このような状況の中, 余暇の充実, 健康の維持・促進としても, スポーツ活動は有意義な活動といえるが, 障がい者は, スポーツ活動に取り組みにくい環境にある. したがって, 障がい者は筋肉の発達が遅いため静的な立位姿勢保持能力が低いと報告されている. このように, 障がい者は運動嫌いが目立ち運動能力が向上しない肥満になっていく傾向があるため, 社会問題となっている. このようなことにならないためにも正しい重心位置で, 静的バランス・動的バランスを保つことが大切である. そのことを踏まえて, 中等部・高等部を比較し立位姿勢による重心動揺の測定結果を運動能力向上, 材料として要因を明らかにし, それらに見あった改善指導法を導き出すことで, ダウン症児及び知的障がい者及び, 発達障がい者の立位姿勢の安定性の向上を目的とする.

2. 対象および方法

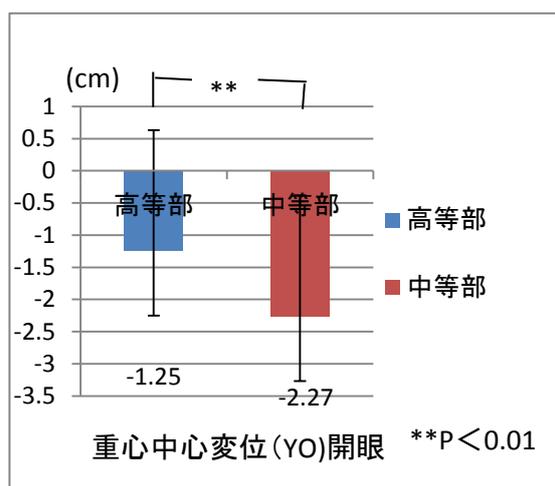
1) 本研究は, S 県 K 養護学校中等部・高等部 69 名(中等部 33 名, 高等部 36 名) 中等部平均身長 $156.64 \pm 11.64\text{cm}$, 平均体重 $49.15 \pm 12.20\text{Kg}$ 高等部平均身長 $159.92 \pm 10.57\text{cm}$, 平均体重 $52.36 \pm 11.48\text{Kg}$ とした. 測定結果を中等部・高等部で比較し, 全国平均とも比較する.

2) 静的バランス測定

重心動揺計に立位姿勢になり, 開眼および閉眼にて各 30 秒間の立位姿勢を測定した. 測定項目は, 開眼閉眼ともに両足の総軌跡長, 単位時間軌跡長, 単位面積軌跡長, 外周面積, 矩形面積, 重心動揺測定項目 10 項目とした.

3. 結果および考察

養護学校の中等部・高等部の被験者は, 平衡反応の未発達や認知障がい認められるため, 視覚からの情報を動揺コントロールに十分活用出来ていないと考えられる. このことから, 知的発達水準が低い知的障がい者は, 平衡機能が低いと考えられる. 平衡機能を向上するためには, 日々の生活や遊びの中で身体を動かすことが重要になると考察される.



4. まとめ

本研究は, 仮説とおり立位姿勢による重心動揺の安定性は不安定であった. しかし Y 軸重心中心点変位 (YO) 前後動は, 中等部の測定値と高等部の測定値と比較をすると, 成長とともに, 足底の重心は, かかとからつま先に向かって重心が変わっている傾向があった.

参考文献

新宅幸憲(2008): 幼児の立位姿勢における静的平衡性の研究
(平成 19 年度大阪体育大学大学院博士論文)p.1-65